

たどえリセットされても

## 自分とは違うもの

5年 Y・Aさん

逆瀧川先生は自分とは違う愛という存在を絶対に受け入れようとしない。先生は言う。「人間には、人間でなければ、できないことがあるのです。命は尊いのです。ロボットには代えません。」しかし、今でも私達はA-Iやロボットにかこまれていて、そのうち人間型A-Iロボットと暮らす日もくるだろう。私達はA-Iやロボットと共に存していくなければならないのだ。でも、もし友達がA-Iロボットだったとしたら、私は柚果のように受け入れることができるだろうか。人にとって自分と違うものを受け入れるのは難しい。自分が自分よりすぐれているとなるとなおさらだ。はるねも愛を受け入れようしなかった。自分とは違い、何でもできる愛にしつとし、傷つけるような言葉を愛に言った。でも、はるねは気付く。自分ができないことを愛ができるのは愛の問題ではなく、自分の問題だということに。そしてはるねは愛に謝り、友達になる。自分とは違い、自分よりすぐれているものを受け入れるには、広い心が必要だ。はるねにはそれがあったのだ。でも、ここで私は思う。全部が全部はるねより愛がすぐれているわけではない。はるねの方がすぐれていること、はるねにしかできないこともあるはずだ。A-Iだって万能ではない。A-Iボットである愛はお母さんにとって生きていいくつえでの心の支えだ。愛がいるからこそ、お母さんは生きていける。でも、お母さんがいなかつたら愛も止まってしまう。つらいことがあってもお母さんが毎日仕事を頑張り、ちゃんと家に帰ってくるからこそ、愛は充電してもらえるし、メンテナンスも受けられる。それぞれにしかできないことがある。

私と友達の関係もそうだ。私は父が日本人で、母が中国人だ。そのせいもあって、中國人の友達がたくさんいる。中國人の友達は私と違つて頑張り屋さんなので、勉強がすぐできる。算数も理科も社会も、いつも私よりいい点数だ。でも、國語だけは私だつて負けていない。私が國語のテストでいい点数をとると、友達は「Yちゃん、すごいね。」とほめてくれる。分からぬところを教えてあげると、「教えてがうまいから、すごくよく分かったよ。」と喜んでくれる。お互いを認め合い、足りないところを補い合つから、私達は友達でいることができる。A-Iと人間の関係もそうなのだと思う。お互いの得意分野で力を発揮し、補い合つからこそ共存できる。それぞれにしかできないことがあるねがこれまで愛に自分がしてきたことを「愛ちゃん。ごめんね。」と謝る。愛は「だいじょうぶだよ。」と答え、「はるねちゃんは、友だちだから。」と続ける。はるねは愛を抱いた。この本の中で私が一番好きなシーンだ。私も相手との違いを受け入れられる広い心を持ちたい。そして、自分ができることに自信を持つて生きていいきたい。